

北海道標津町堅穴住居群の調査

埋蔵文化財センター

文化庁では、遺跡が集中して存在し、周辺の環境が良く残っている地域を、「広域遺跡」として保存・整備・活用するための調査研究に着手することになり、今年度は、北海道標津郡標津町をその対象地域として選んだ。

北海道には、堅穴住居跡が現在なお深くぼみとして地表に残っているところがある。標津町の堅穴は、百千と群集しており、遺存状況も特に良く、深さ2.5mにたつする堅穴もある。そのうえ付近の湿原には、天然記念物級の植物が豊富であって、蛇行する川の風情とともに恰好の自然環境をとどめている。

標津町は、10月、今年度の調査研究の一環として、同町伊茶仁カリカリウス遺跡（堅穴総数約1500）および伊茶仁チシネ遺跡（堅穴総数150）で、堅穴住居跡1軒づつを発掘調査し、また各堅穴住居跡付近の堅穴群分布図を作成した。

カリカリウス遺跡の堅穴は、中央で20cm、壁際で1mの土に覆われ、摺鉢状を呈していた。検出した住居跡は、5.5×5.4m。壁にそって柱穴（径約10cm）16個がならび、東壁に竈をそなえる。竈の焚口には、擦紋土器の新しい段階（藤本強氏のⅰ式）の甕が倒れていた。このほか床面から、アイヌの袋（サラニブ）に酷似する編物、床面直上から上屋の部材とみられる炭化材を検出した。また覆土には、縄文土器（早朝・中期・晩期）・オホツク式土器・早期石刃鍬文化にともなう石刃ほかの石器がふくまれており、この地に古く集落がいとなまれていたことを知ることができた。

チシネ第2遺跡の堅穴には、中央で15cm、壁際で40cmの覆土がみられ、発掘前、皿状にくぼんでいた。住居跡は7.8×5mの長方形。壁際に柱穴10個がならんでいる。炉・竈の存在は認められなかった。床面で出土した小型の甕は、擦紋土器として古い位置を占めるものらしい。覆土からは、続縄紋土器・石器が若干出土した。なおこの堅穴の東側に隣接して、灰黒色火山灰（カムイヌプリ2a～c）をへだてた上面から作られた新しい小堅穴がある。

今回の調査では、堅穴住居跡の発掘前・発掘後に写真測量をおこなった。立木を支柱として利用してスチールワイヤーを張り、測量カメラとテレビカメラとをつりさげ、また、モニターテレビをもちいて撮影基線長と撮影範囲とを確認した。

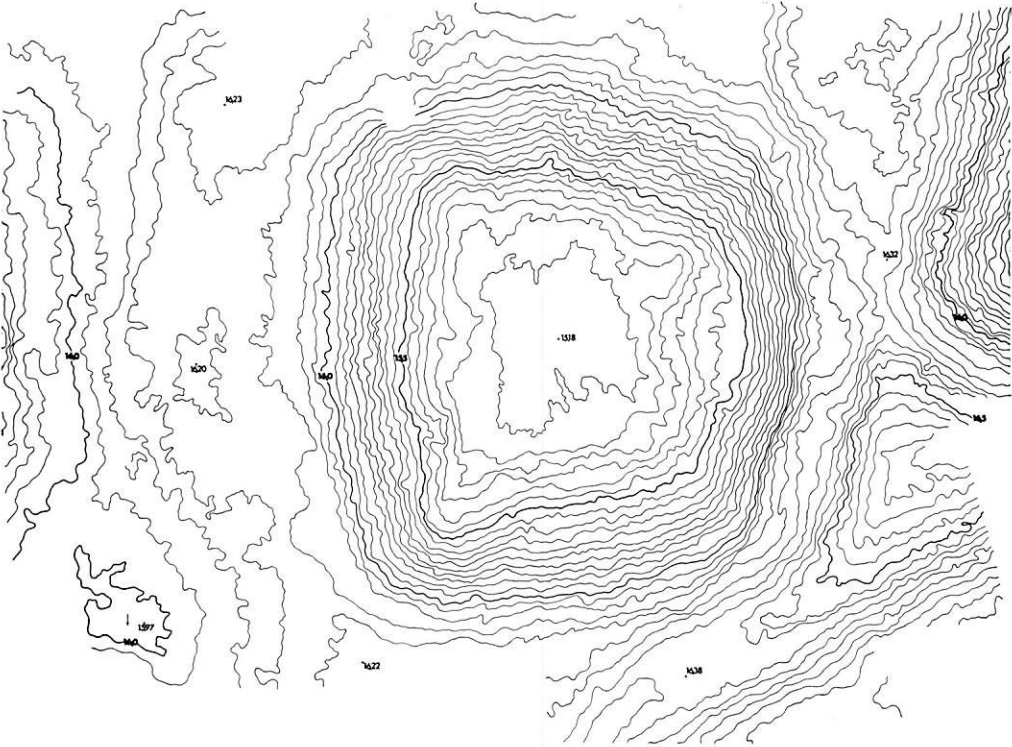
両遺跡にかんしては、すでに縮尺1/6000の堅穴分布図が作成されている。今回は縮尺1/20の地形測量をおこない、発掘した堅穴付近の堅穴分布図を作成した。

北海道標津町教育委員会『標津の堅穴—昭和52年度標津町内遺跡分布調査事業発掘報告書』
1978年3月。

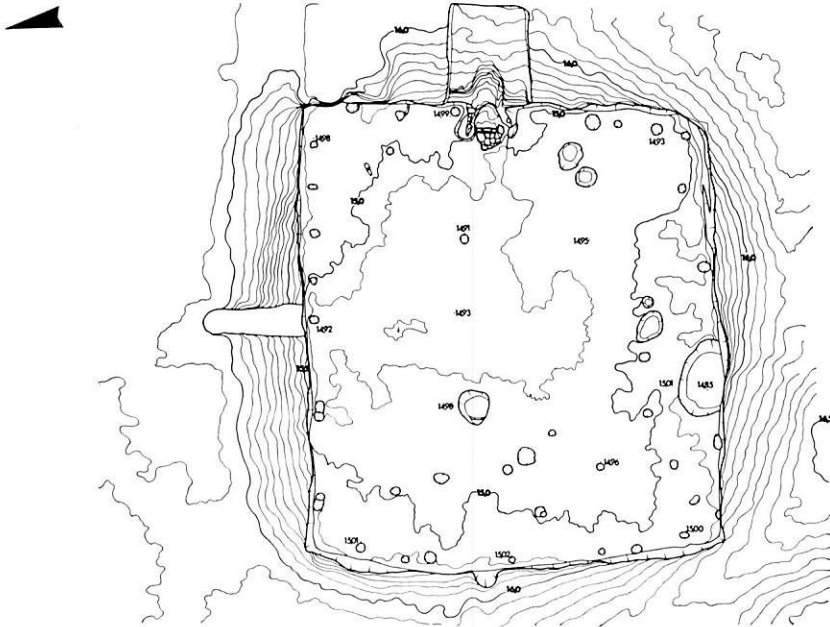
（佐原 眞・西村 康・岡本東三）

北海道標津町堅穴住跡群の調査

発掘前



発掘終了後



伊茶仁カリカリウス遺跡第1号堅穴写真測量図 縮尺1/100。等高線間隔5 cm。